

難波西鶴と

海の道

【93】

森田 雅也

西鶴『武道伝来記』「貞

享4(1687)年刊」巻

二の「思ひ入れ吹く女尺

八」は、広島での純愛が悲

劇を招く話でした。

親に隠して遊び会う村之

助と小督。しかし、その仲

を小督の父親が一方的に決

めた許嫁、基平が知ると

ころとなり、村之助を待ち

伏せ、討ち果たします。基

平は広島から逐電します

なり、広島を出て、乳母の
遠縁を頼り、播州明石へと
落ちて行きます。
小督はその明石の貧家で
村之助との二子、村丸を産
み、女手たけで育て上げ、村
丸は立派な13歳の若武者と
なります。もう全てを話し
てよいだろうと村丸に父の
最後と敵のある身であるこ
とを告げると、早速旅支度
し、基平の故郷、浜松へと敵
討ちに向かおうとします。

も敵討ちに向かおうと用意
していたと髪を切り、鎖
帷子を着込み、この日のた
めに覚えた尺八を持ち、男
の姿となり、ともに旅立ち
ます。乳母を加えた3人は、
明石から神戸を経て、西国
街道・東海道へと進みま
す。さすがに旅に疲れ、一
行は休息も兼ねて大津の石
山寺に詣でます。
古代にも葉式部という熱
い女性がいたことに励まさ
れますが、その時、下僕を
連れた40歳ぐらゐの武士と
遭遇します。その武士は村
丸を見て誰かに似ていると
驚き、下僕は「村之助様の
幽霊」と口走ります。その
話を耳にした一行は立ち止
まり、わざと琵琶湖と広島

母・小督も男の姿で敵討ちへ

の景観を比へた会話などし
ます。

その広島なまりに反応し
た武士は、自分は村之助と
兄弟分であった大谷勘内と
いう者で、敵基平が吉野に
隠れていることを突きと
め、今から討ちに行くとこ
ろであることを明かしま
す。早速、勘内は一行とど
もに吉野へ行き、基平の住
処を探し出し、村丸の後見
をし、村丸は見事、敵、基
平を討ち果たします。

「昔を今に語り伝へり」
と終わるこの敵討ち物語。
西鶴は広島か明石に、確か
な情報源を持っていたので
しようね。

(関西学院大文学部文学
言語学科教授)

13歳になった息子・村丸